

学生の学びに根ざしたFD

—理学療法教育におけるOSCEリフレクション法とFD実践—

平山 朋子（藍野大学・医療保健学部）

松下 佳代（京都大学・高等教育研究開発推進センター）

1. 研究背景と目的

医学・歯学教育では現在、総合的臨床能力・態度・倫理・安全管理の育成を充実させるために、「客観的臨床能力試験」(Objective structured clinical examination; 以下、OSCEとする)が広く実施されている。OSCEは1975年にR. M. Hardenにより、医学生の基本的臨床能力を客観的に評価するために開発された方法である。OSCEはステーションを数カ所設定し、模擬患者と評価者が配置される。学生は模擬患者を対象に与えられた課題（医療面接、血圧測定など）を検査・診断し、その基本的臨床能力を評価される。

我々は、理学療法版OSCEを作成し、さらにそれを学生自身によるリフレクションのための方法として活用する「理学療法版OSCEリフレクション法」(OSCE-Reflection法; 以下、OSCE-Rとする)を開発し実施した。このOSCE-Rの実施は学生たちに広く深い学びを引き起こし、さらには、教員集団による新しい教育内容・教育方法の模索へとつながっていった。本報告では、OSCE-Rから展開していった「学生の学びに根ざしたFD」を紹介し、そのプロセスについて考察を加える。

2. OSCE-Rと学生の変化

(1) 総括的評価から学びの機会へ

OSCE-Rの開発は、2006年の理学療法版OSCEの実施から始まった。理学療法版OSCEは平山が医学OSCEを参考に作成したものであり、当初は、臨床実習前後の臨床技能の総括的評価として用いる予定であった。ところが、学生15名に対して試行したところ、長期臨床実習未経験学生3名の態度・技術があまりに未熟であったため、比較的高得点であった学生のビデオ・評価結果を見せながら彼らにリフレクションを促すことになった（1週間後に再度OSCEを実施）。これがOSCE-Rの始まりである。

(2) 学生の変化

リフレクションの結果、学生たちは態度・技術以外にも自ら広く、深く学び、学習態度にも大きな変化が見られた。実施後のインタビューで、学生たちは「全てがダメだけれども、最もダメなのは患者さんに向かって何も伝わっていないし、自分たちのために自分が中心で勝手に動いているだけだった」「患者さんから自分がどう映っているかを考えたことがなかったと思う」と語り、自ら役割演技法を取り入れるなどして練習するようになり、自己の問題点とその解決方法を具体的に考えることができるようになった。また、「バイト先や家でも、親と話す時も、このOSCEの結果のことをかなり意識して、言葉遣いとか態度とか自分なりに改善してみました」など、学びの場は学校から離れた場面にも拡大していた。学生は、自分の学んでいることが「誰のためのものであるのか」「何のために学ぶのか」という学ぶことの意味や、社会的意味を理解しはじめたことがうかがえた。

3. 学生の学びと教員の変化

初回の OSCE は、研究目的で行われたものであり、学内で継続して実施する予定はなかった。しかし、学生の変化に驚いたある教員より「ぜひ、もっと広く OSCE-R をやりましょう」と提案があった。OSCE-R を広く実施するには複数の教員の理解と協力が不可欠である。そこで、他の教員に OSCE-R の効果を感じてもらうために、2007 年 4・5 月に再度、別の学生たちを対象に OSCE-R を実施した。その結果、今度は参加教員から「臨床実習前の 3 年生全員に実施しよう」という意見が出てきた。それは、教員が、学生が自ら学び、変化していく姿を目の当たりし、OSCE-R の効果を感じたからであった。こうして通常の授業外で特別に予定を組み、OSCE-R を実施することになった。

8 月の 3 年生（96 名）への実施に向けて、6・7 月に 4 年生を対象に試行を繰り返しながら参加教員を徐々に増やし、課題の難易度、評価表の妥当性などについて具体的に検討した。が、この時点ではまだ、一部の教員には OSCE-R の効果に対する疑念や傍観者的な雰囲気が存在していた。しかし、そうした疑念は 8 月の OSCE-R の実施、9 月の臨床実習を経て払拭され、教員たちは「当事者」に変化していった。また、OSCE-R を 3 年生全員に実施したことにより、「○○について教えられていないのではないか」といったカリキュラムや授業の弱点に気づかされることになった。さらに、臨床実習における学生の状況（全体的な高評価と一部の問題）が、OSCE-R の意味や有効性を再認識させることとなり、各教員からいっそうの改善に向けて積極的な意見が出されるようになった。こうした様々な意見を集約し、集団的に検討するために、ある教員からの提案を受けて、「OSCE-R Cafe」と称する検討会を開催することになった。

4. 新カリキュラムに向けての胎動

(1) OSCE-R Cafe の開催

10 月下旬に実施した新しい活動「OSCE-R Cafe」は、厳格な雰囲気で行うフォーマルな検討会ではなく、話題提供の後には、特に司会者を立てずお互いに遠慮なく意見を交換するという会である。そこでは、OSCE-R の効果を検証しながら、①実施方法、②次回 OSCE-R（2008 年 2 月実施予定）の課題、③OSCE-R のカリキュラムの中での位置づけ、について意見が交換された。この会を経て、教員たちは新カリキュラムの導入を視野に入れ、新しい OSCE-R や授業計画を協働で作り上げていく「教員集団」へと変化しつつある。

(2) 新カリキュラムの中での取り組み

現行カリキュラムは、各学年における専門科目と臨床実習の配当のばらつきに問題がある。また臨床技能を学内で実践的に学ぶ時間も少ない。現在、新カリキュラムでこれらを改善することに加え、より実践的な学びの機会を作るために、OSCE-R を授業の中に組み入れていくことが「OSCE-R Cafe」の中で検討されている。

5. 本実践にみられる FD の展開プロセス

以上のように、本実践では、新しい評価法が学生のリフレクションと自発的な学びを促し、そうした学生たちの変化が、その評価に協働で取り組む教員を生み出し、さらに、評価からカリキュラムや授業の再構成へと教育改善・FD の範囲を広げつつある。その意味で、まさに「学生の学びに根ざした FD」がボトムアップに展開されているプロセスをそこに見ることができる。本実践は、理学療法士養成という職業教育を対象にしており、教員間の合意を比較的作りやすい条件の下でなされてはいるが、本実践の FD の展開プロセスは、こうした性格をもたない大学・学部の FD にも示唆を与えうるものと期待される。